

## 神が痛む

エレミヤ書 31章20節

主題；動物の鳴き声、わななく、とか、波がとどろく、など、そこから、感情が激しく動く、そこから、神があわれむというように訳せるハーマーということばが、文語訳で「痛む」わがはらわた彼のために痛む。と訳されています。このはらわたは内臓のことですね。五臓六腑と言いますが、複数形で表わされています。

導入；北森嘉蔵という日本を代表する神学者が、1946年、昭和21年戦後直ぐに出版したのが、『神の痛みの神学』でした。この本は、十字架の愛は、神の痛みに基づいた愛だ、と言っているわけですが。神の痛みに基づいて、という表現が随所に出てきます。罪人に対して、さばきの神と赦しの神が同じ神であるとき、罪びとに対する愛は、痛みなしにはありえない。というのですね。今朝注目しているエレミヤ書の31章20節の文語訳が、わがはらわた彼のために痛む。となっていて、この訳がなければ、神の痛みの神学は誕生しなかったと言われていました。20代の中頃、東京聖書学校での毎週木曜日の講義に、神の痛みの神学を幸いにも著者から直接学ぶ機会があって、いい緊張感の中での貴重な学びでした。今朝注目させていただいているのが、新共同訳では、わたしははらわたが動かされて、わたしは彼を憐れまずにはいられない。と訳されているエレミヤ書31章20節です。

本論；31章全体は、新しい契約という見出しがついていて、その中身は、「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」というのですね。はじめてそうなる、といっているのではないですね。改めてそうなると言っています。

その新しい契約の中身の真髄に当たると思われるのが、20節です。

まず、「エフライムはわたしのかけがえのない息子」で始まりますね。「喜びを与えてくれる子ではないか。」面白いことに、新改訳2017では、「エフライムは、わたしの大切な子、喜びの子なのか。」と訳しています。新共同訳では、ではないか。と問いかけて、そうだ。と肯定しているのに対して、新改訳2017では、なのか。と問いかけて、そこに疑問を呈しているようにも受け止められますが、いずれにしましても、主なる神さまは、ご自身の民を「かけがえのない息子、喜びを与えてくれる」と肯定されました。

福音は、聖書では親子関係で描かれていますね。しかも、創造者がわたしたちを子と呼んでくださる。ここに決定的に揺るぎない神さまの憐れみがあります。どんなに親不孝な子どもでも、親にとってはかけがえのない、喜びを与えてくれる存在だと、神さまはおっしゃっているのですね。

次に、彼を退けるたびに、わたしは更に、彼を深く心に留める。と神さまはおっしゃいました。退けると心に留めるが神さまの矛盾と葛藤を表わしているかのよう

に訳されているのですが。新改訳2017でも、退けるは責めるに、心に留めるは思い起こすと訳されていますが。なぜならわたしが彼に幾たびも語り掛け、彼をわたしがその都度必ず思い起こすからだ。(×2)と直訳するとそのように書かれているんですね。

何度も何度も原語で読み返しているのですが、かつての新改訳のように、わたしも退けるとか責めるというふうには読めずに、むしろ神さまが子に幾たびも語り掛け、その都度その存在を心に留めると読み取れます。親である神さまが、子に語り掛けるというのは、恐れることはない！と言ってあげる事情があったり、あなたはどこにいますか？と問いかけてもちゃんとしたこたえが返ってこなかったりする。それでも、わたしの心は、あなたを心に留める。あなたをちゃんと思い起こすとおっしゃっているんですね。

そして、彼のゆえに、胸は高鳴り、わたしは彼を憐れまずにはいられない。と主はおっしゃっているんですね。胸は高鳴りは、新改訳2017ではわたしのはらわたは彼のためにわななき、と神さまの内臓が激しく動かされているとご自身が表現しておられます。それは、神が痛む。あわれむ。神さまがはらわたを、内臓を激しく動かされた。とだから、憐れまずにはいられない。と。

人は自分の罪のゆえに死にます。けれども、自分の罪ゆえに死ぬわが子を、親である神さまは、居たたまれない！何度も契約を踏みにじてきたわが子を、それでもはらわたがわななきて、憐れまずにはいられない！と。背き去ったわが子を、いつまでも彷徨い続けるわが子に、神は、はらわたが痛み、憐れまずにはいられない！のですね。

結び；神の痛みの神学は、神の子が、死なれた！教会が、この驚きを失った時、教会であることを止める時だ。という問題意識の中から生まれました。今日教会と神学とにとって何よりも緊急なことは、この驚きを取り戻すことだ。福音を新しく発見し直すことだ。と書いて書かれたのが、『神の痛みの神学』でした。著者の北森嘉蔵氏に、この驚きが回復されたのが、今朝取り上げているエレミヤ書31章20節でした。

神がみ子キリストを苦難に遭わせる！十字架は、怒りの神と愛の神とが対立することを物語っていて、そこで神の子ご自身が人間となり、罪と神の怒りと死とを身に負わなければならなかった！というのですね。父がその愛する子を独り子を死なせる！この神の究極的行為が、神の痛みにほかならない。

わたしたちがもし、モリアの山でアブラハムがイサクを捧げる出来事を目撃したならば、わたしたちの眼は、凍ったでしょうね。それは、愛する独り子イサクを燔祭としてささげよ。という神の命令が残酷なものと映った。という信仰のいらぬ眼ではなくて、それが、神の怒りである死を父なる神が愛する独り子に負わせたからです。

神がわたしたちの父であられるというかぎり、わたしたちが苦しみの中に送られる時、神ご自身が父として痛みを経験されるんですね。

孫が皮膚科に行った帰りに立ち寄ってくれて、玄関で、じいじ、薬屋さんで、塗り薬と飲み薬を貰ってきたよ！と話してくれました。その語り口、表情を見て、あっ、優しい男の子に成長したな！と思わずうれしくなりました。子どもはかけがえのない存在ですね。そんな存在を、命を、親がその生き死にを決断しなければならないということがあるとしたら、これ以上の痛みが存在するでしょうか？

心臓が育っていないからと医師に言われて、お腹にいる赤ちゃんの生き死にを親は決断しなければならなくなったという話がありました。生まれてくることはできても、数日しか生きられないのではないかと。言われました。少しでも長く生きてほしいけれど、それがこどもが苦しむことならば、と考えるとどう答えを出していいのかわからない。

神がわたしたちの父であられるというかぎり、わたしたちが苦しみの中に送られる時、神ご自身が父として痛みを経験されるんですね。

イザヤ書53章朗読